

京都府立京都学歴彩館寄託『風葉和歌集』(山本本)について

宮田 光・安田徳子・乾 澄子

はじめに

本稿は、標題に掲げた山本読書室旧蔵の山本本について紹介し、かつ、同系統とみられる京都大学付属図書館蔵本(京大本と略称)・陽明文庫蔵甲本(陽甲本と略称)との相互の關係について考察するものである。なお、現存の最善本と目される陽甲本は巻一から巻十までであり、本稿で扱う対象もその範圍の七五九首に限定するものである。

私たちの参加している名古屋国文学研究会では、平成十二年からこの歌集を輪読するにあたり、陽甲本が前半しかないこともあり、陽甲本と同系統の、歌数の最も多い京大本を底本としてきたが、昨令和元年七月、京都府立京都学歴彩館のご好意により、山本本を調査することができ、山本本が京大本・陽甲本と非常に近い写本であることがわかった。本稿では、この三本と諸本との關係及び三本相互の間の位置づけを示しておきたい。なお、以下、「諸本」と呼ぶのは、名古屋国文学研究会著の『風葉和歌集新注』(青簡舎刊)の凡例に掲げた諸本のうち、古筆切・抜書本を除き、巻一から巻十を持つ二四本及び巻一から巻六をもつ一本の計二五本^(注1)である。また、歌番号は国歌大観番号と同一である。

京都府立京都学歴彩館寄託『風葉和歌集』(山本本)について

(注1)

- 1 宮内庁書陵部蔵甲本(宮甲)
- 2 名古屋市蓬左文庫蔵本(蓬左)
- 3 陽明文庫蔵乙本(陽乙)
- 4 穂久邇文庫蔵嘉永元年写本(嘉永)
- 5 田中登蔵本(田中)
- 6 ノートルダム清心女子大学図書館蔵本(清心)
- 7 日本大学総合学術情報センター蔵甲本(日甲)
- 8 静嘉堂文庫蔵松井文庫本(静嘉)
- 9 石川県立図書館蔵川口文庫本(川口)
- 10 篠山市歴史資料館蔵青山文庫蔵本(篠山)
- 11 彰考館文庫蔵甲本(彰甲)
- 12 丹鶴文庫本(丹鶴)
- 13 宮城県立図書館伊達文庫蔵本(伊達)
- 14 龍門文庫蔵本(龍門)
- 15 天理大学附属天理図書館蔵本(天理)
- 16 東京大学国文学研究室本居文庫蔵本(東大)
- 17 明治大学附属中央図書館蔵本(明大)
- 18 東北大学附属図書館狩野文庫蔵本(狩野)
- 19 内閣文庫蔵和学講談所本(内閣)

京都府立京都学歴彩館寄託『風葉和歌集』（山本本）について

- 20 肥前島原松平文庫蔵甲本（松平）
21 刈谷市立中央図書館村上文庫蔵本（刈谷）
22 龍谷大学蔵本（龍大）
23 藤井隆蔵本（藤井）
24 同志社女子大学附属図書館蔵本（同大）
25 国文学研究資料館蔵本（国研）（巻一〜巻六）

一 山本本 書誌

整理番号 二二四一

綴葉装 上下二冊

表紙 藍色地金欄綴子。二重の菱形枠（間に流水紋）の中に菊

花紋。

題簽 なし。

見返し 上部に金泥で龍の刷り模様。下部は金砂子。

料紙 薄様。虫損なし。朱なし。

寸法 縦二二、一センチ。横一七、八センチ。一面 二一行。

上巻 遊紙 前後ともなし。 墨付 一五三丁

下巻 遊紙 前後ともなし。 墨付 二〇二丁

上巻 （一ウから起筆） 序〜巻八。

各巻の内題 「風葉和歌集 巻第一／春上」（巻一〜巻六も同様）。

巻七の「釈教」の前行に「風葉和歌集 巻八」と書き入れ。

巻八の内題を「風葉和歌集 巻八（九）」と訂正。

巻八の「羈旅」の前行に「風葉和歌集 巻十」と書き入れ。

巻二八歌85詞書を同筆の書き入れにより補う。

巻四二8歌を同筆の書き入れにより補う。

巻四秋上・巻五秋下は他の巻とは別筆。

下巻 （一ウから起筆） 巻十一〜十八の後ろに哀傷・賀を配置。

各巻の内題を「風葉和歌集 巻第九」以下、二巻ずつずらして訂正し、「風葉和歌集 巻第十七（九）」「風葉和歌集 巻第十八（廿）」と

訂正し、巻十九として哀傷・巻廿として賀を置き、二十巻の体裁にしている。猶、一六二丁は半切で一六一丁と一六三丁の間に挿入さ

れている。一六二丁には雑三の138番の歌から144番詞書までが収められており、一六三丁には138番の歌と139番の詞書及び144番詠者名から

144番歌までが収められている。おそらく、初めの書写段階で139番の詞書まで書写したところで、たまたま親本を一丁分（139番詠者名

144番詞書）飛ばして、そのまま一六四丁表の雑三の巻末の144番歌まで書写してしまったものと思われる。かなり書き進めた後に脱落に

気づき、飛ばした一丁分を別紙に書写して、一六二丁として挿入した

ものと思われる。したがって、138番の歌と139番詞書が重複している。

最後尾に奥書あり（句読点は筆者による）。

此集之作者不知為何人。十九

二十之卷載長歌物名折句

連歌等之由見干序文。今此兩

卷紛失嘆惜（林原乙は情）不少焉。仍分

七卷之末釈教為八卷、分八

卷之離別羈旅為九十之

十九二十之卷、以備二十卷之

員。後來若有全部之本

可復其旧者也。穴賢々々。

寛文七年^末

神無月十一日

（林原乙は八年／正月日）

〔付記〕山本の本文は京大・陽甲本に非常に近い。脱落もなく、知られている限りの歌はすべて網羅している。完本としては最善本といふべきか。但し、この山本は、京大・陽甲本が宮甲本以下の伝本と同じく巻七が神祇釈教、巻八が離別羈旅、巻九が哀傷、巻十が賀であるのに対して、右に示した如くに修正されている。

この体裁及び奥書(識語)から思量できることは、まず、①山本は京大・陽甲本と同系統の親本を書写したが、その時、「哀傷」巻と「賀」巻を雑三の後へ移して書写した。そのために、巻九恋一、以下巻十六雑三と改め、巻十七哀傷、巻十八賀と改めた。勅撰集においては、最終巻を賀で終わる体裁が非常に多いので、それに倣ったものかと思われる。②次に、『風葉集』は序文から本来二十巻であったことがわかっている。巻十九と巻二十が散逸しているこの本の状態を便宜上二十巻にするため、巻七の神祇釈教と巻八離別羈旅を分割して、巻七神祇、巻八釈教、巻九離別、巻十羈旅とし、巻十一恋一以下、巻十八雑三に戻し、巻十九哀傷、巻二十賀と、書人によって改めた。③その上で奥書を書いた。この書入は墨色が本文と異なるが、本文と同筆かと思われる。奥書がこの二段階の作業を一連のものとして記していること、巻数を改めるのにミセケチでなく書き重ねている場合が多いこと等から、巻数の変更は同じ書写者による可能性が高いと思われる。以上のことから、山本は寛文七年(一六六七)十月十一日に成った二十巻本そのものと判断する。書写者は未詳。

一方、山本は、林原文庫他に所蔵されている池田光政筆の八種の抜書本(原豊二「池田光政と「抜書」」『風葉和歌集』『拾遺百番歌合』をめぐって)、『ノートルダム清心女子大学紀要』(四〇一、二〇一六・三)に詳しい紹介がある)、光政長男綱政筆の慶大本(恋一のみ)・神宮本(抜書本)とも非常に近い。特に、林原乙本は山本と全く同じ奥書を持つが、林原乙本の日付は翌年(寛文八年)正月である。同文の奥書なのになぜ日付が異なるのか疑問だが、林原乙本は抜書本なの

京都府立京都学歴彩館寄託『風葉和歌集』(山本)について

で、林原乙本から山本を作成することは不可能である。したがって、池田光政が作成した抜書本の親本は山本またはその写本と見るほかはない。或いは、寛文八年正月に、山本を書写した本が作られていたのかも知れない。それが林原乙本の親本で、池田家に所蔵され、少なくとも光政から綱政には伝えられたと考えることはできる。

また、神宮文庫蔵本は、「延宝式年(一六七四)寅極月五日忠清書写」の奥書を持ち、四季・神祇・釈教・雑・離別・羈旅・哀傷の順で一七七首が抜き出されている。池田光政書写本と近似している。恋と賀がないので詳細はわからないが、山本から更に、離別羈旅も雑の後に廻した写本が作成されていた可能性を窺わせる。

〔伝来〕本書は山本亡羊読書室旧蔵本である。この読書室は平安読書室とも呼ばれ、京都油小路五条で、江戸時代後期から明治にかけて儒医山本家が主宰した家塾で、濫觴は天明六年(一七八六)、亡羊の父封山が儒医として勤仕した西本願寺を退任するにあたり、文如上人から下賜された学問所を自宅に移築、講堂として経書の講義を行ったことに始まる。この読書室が世に知られるようになったのは、次代亡羊の時代で、亡羊は、本草学・医学・儒学を修め、書と詩文、礼法、雅楽、和歌、槍術、剣法も学んで、「読書室」に加えて、邸内に薬草園を備え、本草学・医学・儒学の講義と物産会や採薬を行い、多くの弟子を育て、自らも多数の著作を成した。読書室には、講義や研究のために多数の蔵書や標本が蒐集され、公開もされていた。禁門の変(元治元年(一八六四))で読書室が焼失したが、蔵書や標本は難を逃れて残った。亡羊歿(安政三年(一八五六))後の明治八年(一八七五)、五人の息子によって読書室は再建され、活動もさらに発展し、近年まで継承されていた。読書室の蔵書は現在、一部は愛知県西尾市立図書館瀨文庫にも所蔵されているが、大半は京都府立京都学歴彩館に寄託されている。蔵書の中心は亡羊とその息子が専門とした本草学・博物学に関する著作であるが、素養のあった漢詩文・和歌にかかわるものも含ま

京都府立京都学歴彩館寄託『風葉和歌集』（山本本）について

れる。本書はそうした蔵書の一つであるが、読書室の蔵書となった経緯は、亡羊の時代かその子息の時代かも含めて、全く不明である。

二 京大本・陽甲本・山本本と諸本との相異点について

1 諸本の脱落・錯簡（「詞」は詞書、「左」は左注、「詠」は詠者名を示す。）

115歌（嘉永あり・二四本欠）・161（二五本・全文欠）・337歌（二五本欠）・340詞（二五本欠）・535歌（二四本欠）・604詠（二四本欠）・606（二四本・全文欠）・610詞（花を）／＼614詞（侍りてかの）（二四本欠）・629詞／＼633詞（二四本欠・629詞山本欠）・671詞（きこへさせ給ける）／＼674歌（二四本欠）・685歌下句／＼689歌上句（二四本欠）・734（二四本・陽甲・全文欠）

以上、115・629・734を除き、諸本に欠けているものが、三本にはすべである。また、諸本は571詠／＼574歌が580歌の後に入っているが、三本にはこの錯簡がない。これだけでも、諸本に対して三本が圧倒的に優れていることがわかる。例外的に548詞（かへし）が諸本にはあるが三本にはない。これは、返歌ではなく、唱和であるかもしれない。

なお、京大本は秋下の巻末（341／＼363）を欠いているが、これは、本文が劣っているというよりは、別の何らかの事情で失われたと見るべきであろう。

2 三本と諸本の部分的な異同

三本が一致して諸本と異なる箇所は、1を除いて、概算でも一三〇ほどある。以下に任意に例を挙げておく。漢字・仮名・用字の違いは無視した。猶、三本欄の○内は三本と同文の諸本名、諸本欄の○内の漢数字は異文の諸本数、また異文の諸本名。

ア、明らかな異同

42 詠	(京大・陽甲・山本)	中宮	(諸本)
446 歌	共なれ (嘉永)	ともかな (二二)	ともしれ (日甲)
563 詠	中宮 (丹鶴)	中将 (二三)	
573 詞	水	水うみ (二四)	
583 歌	木のはを衣苔を	木のはの衣苔の (二四・苔龍大)	
603 詠	内大臣	関白 (二四)	
642 歌	秋もする葉の (天理・東大・明大・狩野)	秋にもするは (二〇)	
イ、脱落			
97 詠	(京大・陽甲・山本)	中納言 (諸本)	
	中納言源	中納言 (二四)	
122 詞	春風に物うくみゆる	中納言源中将 (日甲)	
	山吹はこゝのへにてや	欠 (二五)	
269 詠	源中納言女	源中納言 (二五)	
270 詞	いひわひて	欠 (二五)	
444 左	給ておほとのもりと	給ける (二四)	
	もなき (に京大) おほん夢につけ給ひける		
547 詞	かのくにの人 (宮甲・丹鶴)	かのくにの人 (二二)	
677 詞	みまかれりけるに	みまかれりけるに (二四)	
ウ、衍字			
123 詠	(京大・陽甲・山本)	(諸本)	
	二条の (天理・東大・明大・狩野)	二条院の (二二)	

236 詞 一条

一条院(二四)

247 詞 六条御息所

八(一イ)条院(狩野)

565 詞 いろ

六条院御息所(二五)

582 詞 侍ければ

まゐり(二四)

エ、誤読

(京大・陽甲・山本)

169 歌

かくる(松甲)

かくる(二四)

355 歌

風も

風に(二五)

460 歌

かはるなど(刈谷)

かはるなよ(二三)

534 歌

心よ

心も(二四)

547 歌

別てふるは

別てふなは(二四)

571 歌

ゆふつけ鳥も

ゆふつけ鳥と(二四)

602 詞

一けることしも

一けるにとしも(二四)

620 歌

君なくて

君ならて(二四)

640 歌

つねに

つるに(二三)

659 詞

さいひしそ

つるの(狩野)

675 詞

すきかけに心くるしけ

さひしう(二三)

682 詞

いろきて

欠(嘉永)

オ、その他

すきかけも心くるしければ

なれは

(二四・きかけ蓬左・陽乙

676 詞

や

・彰甲・内閣)

676 詞

いろきて

いろにて(二四)

オ、その他

(京大・陽甲・山本)

676 詞

や

(諸本)

676 詞

や

なみたのかゝりけるにや

676 詞

や

(二四)

ア、エの例をみると、諸本の脱落と考えられるものが三本の衍字で

あったり、諸本の衍字と考えられるものが三本の脱落であったりする

場合もないとは言えないが、おおむね三本の方が正しいと考えられる。

ごく僅かの差ではあっても、三本と諸本が鮮やかに分かれる例が多い

ので、この両系統にはかなりの距離があり、京大・陽甲・山本の三本

は、恐らく共通の祖本を持つ、優れた写本と言えよう。しかし、オに

挙げた676番詞書は、「誦経にせんとしけるに、なみたのかゝりけるに

やいろのかへりたるを」という文であるのに、三本の祖本が、「ける

に」の目移りによって「なみたのかゝりけるに」を落としたと考えら

れる。ゆえに、この三本或いはその祖本は、この部分を有する他の諸

本の親本ではありえない。

三 京大・陽甲・山本の三本の差異について

三本の間のそれぞれの独自異文を挙げて検討してみることにする。

1 京大本の独自異文

京大本の三本間における独自異文は、概算でも一六〇近くある。

ア、京大本の脱落

① 詠者名 2・4・24・46・64・80・92・120・136・196・199・202・

204・206・221・229・230・245・319・534・751

② 詞書 90・308・336・601

③ 巻末の欠落 (341、363)

イ、異同(任意の例を挙げておく)

(京大)

25 詞

うきより

(陽甲・山本)

うきより

87 詠

ひろきは

ひろきは

134 歌

せこ

せみ

京都府立京都学歴彩館寄託『風葉和歌集』(山本本)について

167 歌	なかれても	なかれてと
194 歌	おきぬる	おきぬる
302 歌	いりならん	いかならん
414 詞	よほふ	にほふ
435 歌	いくか	いくよ
446 詞	うきて	かきて
451 左	されは	これは
464 詞	かもの	かりの
522 詞	くにさせ	くたさせ
523 詞	きにえ	きこえ
604 歌	かなし	かれし
665 詞	ひとりたち	ひとりこち
677 歌	君の	君か
711 詞	なとくして	なとくして
735 詞	をさせ	せさせ
317 詠	歌	弁
671 詞	家に	色に(宮に)諸本)
745 歌	露	鶴

京大本は、陽甲・山本本に比べて不注意な誤りが非常に多い。脱落も多いが、イに挙げるような誤読が何度も繰り返される。挙げた順に、

「き(起)」「↑「ち(地)」「き(幾)」「↑「さ(左)」「こ(己)」「↑「み(三)」「も(毛)」「↑「と(止)」「ぬ(奴)」「↑「る(居)」「り(利)」「↑「か(可)」「よ(與)」「↑「に(爾)」「か(可)」「↑「よ(與)」「う(宇)」「↑「か(可)」「さ(左)」「↑「こ(己)」「も(毛)」「↑「り(利)」「に(仁)」「た(多)」「太(太)」「に(仁)」「こ(己)」「の(乃)」「↑「か(可)」「く(久)」「を(遠)」「↑「せ(世)」「

など。漢字も、317詠・745歌のように、似た字を適当に用いる場合がある。671詞は喪服を意味する「色に」が正しい。「色」と「宮」を誤るのはよくあることであるが、「家」となると理解に苦しむ。

京大本と陽甲本を比べると、各丁の行数・字配り・字体などが酷似していて、祖本を同じくする距離の近い本であると思われる。陽甲本と並べると、不注意に書き飛ばした感のある京大本の欠点がよく見えてくるのであるが、親本の方も、やや読み辛い字ではなかったかと推測される。

2 陽甲本の独自異文

陽甲本の三本間における独自異文は三四例ある。

ア、陽甲本の脱落

734全欠・681詠欠

イ、脱字または衍字による異同(○は正と思われる表記。)

233 詠	さかの院	(陽甲)	(京大・山本)
267 詞	○題しらす		○さかきの院
277 詞	かきならし		欠
307 詠	太政大臣		かきならし侍ける
518 詞	よみ侍ける		○太政大臣女
557 詞	いてゝたち		よみける
725 詞	関白		いてたち
ウ、誤読または訂正による異同			関白の
91 歌	にはひは	(陽甲)	(京大・山本)
216 詠	○右の		にはひそ
284 詠	○仁和寺法親王		後の
311 詞	ひとりこたせ		仁和寺の親王
			ひとりたたせ

312 詞 ○かた うた
 316 歌 おきふし
 364 歌 うへは うへに
 373 詞 ○日 月
 386 歌 ふるえ ふるは
 400 歌 うへ うつ
 408 歌 わひさする わひまさる
 430 詞 つかはさせ つかえさせ
 472 詞 ○うみ かみ
 495 歌 みる(ぬ) ○みる
 547 歌 ほとゝ ほとに
 600 歌 月は 月そ
 617 詠 下柳 ○下折
 634 詞 ○とて とそ
 731 詞 月月最 ○日
 735 詞 たり たまひ
 757 詠 民部卿 民部

他の四例は「り」と「る」の差異なので省略した。
 284 詠の「法親王」とするのは諸本の中でも陽甲本のみであるが、諸本は「法」を「の(能)」と誤読したか。311 詞は「源氏物語」賢木巻、316 歌もおなじく幻巻を典拠とする。陽甲本は『源氏物語』の本文と一致している。386 歌も「ふるえ」とするのは、諸本の中でも陽甲・田中本のみ。歌語に「萩の古枝」の用例が多いが「萩の古葉」の用例はない。757 詠も、陽甲本は典拠の『うつほ物語』菊の宴巻と一致している。495 歌の「見ぬ」は、もともと「見る」と書いたものを見セケチで訂正している。詞書に、「漸見無数仏」と、『法華経』方便品から引用しており、「無数仏」を読み誤って、歌の「かずの仏をみる」を「みぬ」と訂正したのか。617 詠は「萱が下折」を誤ったもの。以下、通常発

京都府立京都学歴彩館寄託『風葉和歌集』(山本本)について

生するような誤写については省略する。
 陽甲本は、京大本と比較してみると、字配り・字体なども含めて、親本を極めて忠実に写していると思われる。311 詞・316 歌・386 歌・757 詠のような場合、典拠に忠実な陽甲本の本文の方が親本の本来の姿を伝えているのか、或いは逆に、典拠に合わない親本の本文を陽甲本が訂正したのか。親本の忠実な書写か、独自の判断による訂正か、と言え、前者の方が可能性が高いように思われる。現存の写本の中では陽甲本は最も古く、陽明文庫の名和修氏の御教示によると、元和(一六一五〜二四)・寛永(二六二四〜四四)頃の写本かという(『伝本紹介』、『風葉和歌集研究報』第五号・二〇〇六年九月)。前半の巻だけでいえば、陽甲本が最善本であろう。しかし、京大・山本本以外は、陽甲本も含めてすべての諸本が誤番を欠いている。そのため、陽甲本或いはその親本は、京大本・山本本の親本ではない。

3 山本本の独自異文

山本本の独自異文は一四例ある。

108 詞	はな見にまかりて	花にまかりて	(京大・陽甲)
230 歌	ゆふへは	ゆふへを	(京大・陽甲)
295 歌	虫の音に	虫の音を	(京大・陽甲)
300 歌	うらみん	か(う)らみぬ	(陽甲)
347 歌	うつろふいろや	うらみぬ(京大・諸本)	(京大)
398 詠	はか(り)ま	はかま	(京大)
603 詞	きこえ	きこに(え)	(陽甲)
629 詞	欠	きこに(京大)	(京大)
		御返し	

京都府立京都学歴彩館寄託『風葉和歌集』（山本本）について

693 詞 まかりて

すかりて

698 詞 ことなく

よなく（陽甲）

706 歌 つきても

よなく（京大）
つきてを（陽甲）

741 歌 のとけかり

つきてお（京大）
さやけかり

752 歌 春を

松を

756 詞 いはほ

いはひ

108 詞・398 詠・693 詞・698 詞・706 歌・752 歌・756 歌は、山本本か、或いはその親本か、どの段階で行われたかは不明であるが、独自の判断に基づく訂正であろう。752 歌は、典拠の『うつほ物語』祭りの使巻によって「かげに」とする本（天理・東大・明大・狩野）もあるが、ほとんどの本は「松を」とする。しかし、「まつ」では同字の病を持つ歌になつてしまうので、原態は典拠の『うつほ物語』のままに「かげに」だったと思われる。これを「まつを」と誤写した本が作られ、さらに転写された。これを「春」と異体字の「恣」との誤読と考えて、独自に「春」と訂正したのが、山本本或いはその親本の筆者であろう。230 歌・295 歌は親本（？）の傍書を参考にして判断したものか、603 詞は、陽甲本から察するに、親本は「きこえ（江）」であつたと思われる。

300 歌・347 歌・629 詞・741 歌は親本の誤りか、山本本の筆者の誤りか。

陽甲・京大本が袋綴じであるのに対して、山本本は綴葉装である。行数も字配りも二本とは異なっている。同じ仮名でも字母が異なる場合も多い。陽甲・京大本の親本と山本本の親本は、多少の距離があると思われる。

山本本の特徴は、読み誤りのないように明瞭に写す態度である。例えば398 詠の「はかま」の「か」を訂正して「はりま」（播磨）とした字は、山本本は「り（里）」であり、紛らわしい「り（利）」ではない。また194 歌は「おきぬる」を京大本が「おきぬる」と誤ったところであ

るが、陽甲本が「る（居）」であるのに、山本本は「る（井）」を用いている。紛れないためであろう。煩わしいのでいちいち挙げないが、山本本には、正確さを重んずる、読者への心遣いが感じられる。巻数・巻序を変えたことはやや独断的であるが、奥書にその根拠と経過をきちんと記している。現存する完本の『風葉和歌集』の中では最善本と言えよう。

【付記】

山本読書室旧蔵『風葉和歌集』の調査を御許可下さった所蔵者及び京都府立京都学歴彩館に深謝致します。

『風葉和歌集』は、名古屋国文学研究会によって輪読が進行中です。本稿に用いた諸資料は会員諸姉の努力の成果によるものであり、厚く御礼申し上げます。研究会の成果は『新注和歌文学叢書・風葉和歌集新注』（青簡舎刊）として刊行中であり、近く第三冊が発行される予定です。